

「つたえること・つたわるもの」 №200
〈いのち〉と〈からだ〉の社会学2
死んだら、一巻 (いのち) の終わり？

健康ジャーナリスト 原山建郎

今回のトピック (話題) は、「死んだら、一巻 (いのち) の終わり？」という禅の公案 (問い) です。

この「一巻 (英語で volume=巻物)」とは、私たちがいま生きている (この世の) 人生という「物語」のことです。私たちは、あるとき「there (あっちの世界)」から母親の胎内にワープし、30 億年あまりの生命進化プロセスを十月十日 (とつきとおか) という短期間で学んだのち、「here (こっちの世界)」におぎゃあと生まれました。そして、「here (こっちの世界)」を 80~100 年ほど喜んだり怒ったり哀しんだり楽しんだりしたあと、いつの日にか「here (此岸:この世) の世界」から「there (彼岸:あの世) の世界」へと還っていきます。仏教ではそれを「いのちの往還」、つまり「肉体の死」を通して、再び「there」で生きる (往生) と呼んでいます。birthday (誕生日) は、初めて呼吸した日 (初呼吸記念日) のことです。

1. 日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか

竹内整一さん (東京大学教授) は、『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』(ちくま新書、2009 年) で、別れのことばは「三つのタイプに大別できる」と述べています。

「さらば」「さようなら」とは、本来「然 (さ) あらば」「さようであるならば」ということで、「前に述べられた事柄を受けて、次に新しい行動・判断をおこそうとするときに使う」とされた、もともと接続の言葉です。その本来接続詞である言葉で、日本人は、すでに一〇世紀のむかしから別れてきているわけですが、なぜわれわれは、このような言葉で別れてきたのだろうか、という疑問でもあります。

たしかに、「さよなら」「さようなら」自体は後退してきたとしても、しかし、なお、ごくふつうの日常語としても「それでは」とか、「では」

とか、「じゃあ」といった言い方は使われています。大阪弁の「ほな」、東北弁の「せば」「だば」も、まったく同じです。そこには、「さようなら」=「さようであるならば」と基本的には同じ言葉遣いを見出すことができます。なぜ、われわれは「それでは」「さようであるならば」と別れてきたのか、別れているのか、という問題です。

ところで、世界の別れの表現、別れ言葉を眺めてみますと、それらは、おおよそ、次の三つのタイプに分類することができます。

- ① “Good-Bye (グッド・バイ)” “Adieu (アディオユー)” “Adios (アディオス)” “Addio (アディオ)”
- ② “See you again (シー ユー アゲイン)” “Au revoir (オ ルボワール)” “再見 (ツァイチェン)” “Auf Wiedersehen (アウフ ヴィダーゼン)”
- ③ “Farewell (フェアウエル)” “安寧 (アンニョン) ヒ、ゲセヨ (ケセヨ) 안녕히 계세요”

①の“Good-bye”というのは“God be with you (※you は古英語では ye であった)”が約 (つづ) まったとされるもので、「神があなたとともにあらんことを祈る」という意味合いの別れ言葉です。フランス語の“Adieu”は“dieu”が神、“a”が「〜へ」とか「〜において」という意味の前置詞ですので、「神の御許に」という意味です。スペイン語の“Adios”、あるいはイタリア語の“Addio”も同様の言葉で、別れに際して、神のような存在のご加護を願うという別れ方です。

②は、“See you again”「再び会いましょう」というタイプの別れ言葉です。フランス語の“Au revoir”は、“re”「もう一度」、 “voir”「会う」という意味がこめられています。中国語の“再見”は、文字通り、「再び見 (まみ) えましょう」ですし、ドイツ語の“Auf Wiedersehen”も、“wieder”「再び」、 “sehen”「会う」です。(中略)

③の“Farewell”は、“well”「うまく」、 “fare”「やって行って下さい」という別れ言葉です。朝鮮語の“アンニョンヒ、ゲセヨ(ケセヨ)”の「アンニョン (안녕)」は漢字で書くと「安寧」で「安らかに行って下さい」「お元気で」の意味がこめられています。ラテン語の“Salve” “Vale”も、

ともに「お元気で」の意味です。

世界の別れ言葉は、だいたいこの三つのタイプに大別されます。日本人の場合、①の「神の御許に」とか、あるいは「仏の御加護を」といったような言い方で別れることはあまり一般的ではありません。②では、「またね」とか「じゃあ、また」と言って別れますし、③でも「御機嫌よう」とか「お元気で」というような別れ方はごく一般的に使われています。しかし何といっても、日本人の別れ言葉としては、「さらば」「さようなら」がもっとも一般的でしたし、さきにも述べたように、「それでは」「では」「じゃあ」にもまったく同じ発想があります。

ふたたび問えば、なぜ日本人は、このように、「さようなら(ば)」「それでは」といった言い方で別れてきたのだろうか。その別れ方が、世界では一般的でないとするれば、それは、日本人の、人生や世界のどのようなとらえ方、また他者のどのようなとらえ方に基づいているのだろうか。

『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』
「はじめに」12～33 ページ

次に、同書が引用した『やまとことばの人類学』(荒木博之著、朝日選書、1985年)からの孫引きを紹介しますが、竹内さんは「さようであるならば」の**たちどまり**に注目しています。

たちどまりとは、「不易流行(いつまでも変化しない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねているものをも取り入れていくこと)」を繰り返す**いのち**、「あちら」から「こちら」にやってきて、再び「あちら」に還る「死んでも死なぬ**いのち**の、いわば確認と承認のことです。

日本語の別れの言葉である「さらば」も、いままでの「こと」が終わって、自分はこれから新しい「こと」に立ち向かうのだという心のかまえを示す特別ないい方であるといっているの

めとする、「そうであるならば」という意のいい方を使ってきたのは、日本人がいかに古い「こと」から新しい「こと」に移ってゆく場合に、必ず一旦立ち止まり、古い「こと」と訣別しながら、新しい「こと」に立ち向かう強い傾向を保持してきたかの証拠である。

『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』「さらば、さようなら」という言葉の歴史」27～28 ページ

祖父(原山政記、昭和18年12月没、法名:慈眼院积廓真居士)は、私が生まれる(昭和21年)三年前に亡くなりました。遺影の写真でしか会ったことはありません。しかし、次のような辞世の句を遺しました。祖父の色紙を東洋鍼灸の授業で紹介する機会を得たのも、何かのご縁でしょう。

**肉體よ仮りの宿りは今日(けふ)限り
一切空にかへれ左(さ)よなら**

現世の「からだ(殻=容れ物)」を仮り(かりそめ)の宿としていた「わたし」とは、いったい、何者なのでしょう。現世の「からだ(肉體)」に別れを告げて「一切(すべて)空(くう)にかへれ(還れ)」と旅立つその先には、どのような世界があるのでしょうか。

この「わたし」という生物医学的・宗教哲学的アイデンティティを考える上でも、「子どもの臓器移植」を法的に可能にした「親によるわが子の脳死判定」同意問題(移植医療)や、妻以外の女性(妻の実母も含む)の子宮に受精卵を着床させて出産まで依頼する「代理母」問題(生殖医療)を考える上でも、「さよなら」というひと言はとっても重たい「人生の大問題」なのです。

2. 生命の由来と将来

松岡正剛さんは、宇宙物理学者・佐治晴夫さんとの講義+対談『二十世紀の忘れもの トワイライトの誘惑』(雲母書房、1999年)第四章「空の破片」【講義】で、生命の由来と将来について書いています。もちろん、「由来」は「由(よ)って来(き

た)るところ」を、「将来」は「将(まさ)にやっ
て来ようとするところ」をさしますが、松岡さん
は、【われわれの存在というものは、ちょうど由来
と将来の真ん中の現在にある。そうすると「由来」
は過去のことで、「将来」は未来のことだと考えた
くなるんですね。しかし、こう考えるとちょっと
まずい。というのは、たとえばぼくの体の中にあ
る遺伝子には遺伝情報が入っているんですが、こ
れは「由来」ももっているし、「将来」ももって
いる。つまり、ぼくの存在の現在には、過去も未
来も含まれている。そう考える必要があります】と
述べています。なるほどなるほど、そのとおりで
すね。その先を読んでみましょう。

二三、四歳のときというのは父親が癌で死
んだころですが、その父親の死に方に非常に疑問
をもち、医者をつらつらと歩いて、結局、
日本の医者の中ではその疑問に答えてくれる人
には巡り会えず、それで初めてぼくはアメリカ
へ行くことになるんです。

日本で一冊のある本を見つけたんですね。そ
れは『メッセージはバッハ』という本(※『細
胞から大宇宙へ——メッセージはバッハ』＝ルイ
ス・トマス著、橋口稔+石川純訳、平凡社、1976
年)で、最初、何とはなしに読んでいたんです
が、とてもいい本で、自分が葬送行進曲をかけ
られる日が来たら、それはやめてバッハをかけ
てくれということで終わっている本(注1)で
す。著者は生命についていろんなことを書いて
いる、ルイス・トマスというニューヨークの国
立ガンセンターの所長さんでした。この人なら
ぼくの父親の死についてのちょっとした疑問を
解いてくれるかもしれないとそう思い、会いに
行ったんです。

そのときルイス・トマスが最初にぼくに聞い
たことがある。それは、「松岡さん、あなたは一
個の生命ですか」という質問です。すごい質問
ですね。ぼくは一瞬、黙ってしまいました。ル
イス・トマスの答えは、「生命はひとつではない」
ということです。

命はひとつではない！ これはショックでし
た。なぜひとつではないかといえば、「あなたの
体の中には、大腸菌が何億いると思いますか？
サナダムシだっているかもしれないし、いろん
な微生物が生きています。ひとつひとつの細胞
だって生きています。だからあなたの生命は一
個ではないし、お父さんの死も、ひとつの死と
して考える必要はない」ということでした。わ
れわれには、複合的な生命の状態が重なって
いるのだということです。その複合的な生命状態
の総体として松岡正剛という存在があることな
ります。

これはいわれてみると納得できることですが、
最初からこのようにはなかなか考えられない。
誰だって自分是一个の生命だと思っています。
しかし、そうじゃない。われわれはたくさんの
生命の流れの乗り物である、そう見られるわけ
です。

(『二十世紀の忘れもの トワイライトの誘惑』「生命
の由来と将来」195～196 ページ)

松岡さんは「生命の由来と将来」の後半で、分
子生物学が解析してみせた「セルフイッシュ・ジ
ーン(利己的遺伝子)」にふれて、【遺伝子は自分
の延命のための戦略にもとづいて宿主を決めて
いる。もう少しキザに言えば、私たちは遺伝子のホ
テルにすぎなくて、遺伝子そのものは死に絶えな
いで、私たち個体がホテルとして遺伝子に乗り換
えられていく】というように、【遺伝子の側に立っ
て、すべての「由来から将来への道筋」を説きす
ぎると、これは遺伝戦略の中に私たちの全地球が
覆われ乗っ取られている、テイク・オーバーされ
ているんだ、ということになります】という大き
な問題点を指摘しています。そして、さらに……

私たちの細胞には「液性コミュニケーション」
というはたらきがあります。液体型のコミュニ
ケーションですね。たとえば、私たちは最初に
単細胞から生まれていますが、それが多細胞に
なって、その多細胞をたくさんつくって個体と

いうものを形成している。実は、生命が多細胞の状態まで進化したときが非常に危険だったんですね。なぜ危険かというと、DNA や RNA はさきほども言ったように、利己的なわけです。セルフイッシュであり、自分の延命策ばかり考えている。遺伝子は自分のために自己戦略を選んで、進化の歴史の中に誕生した。もっとはっきり言えば、そういう情報戦略をもって地球上にやってきたのです。そしてこの遺伝子が細胞の中に入ったわけですが、多細胞はその中にたくさんの遺伝子をもつことになります。個々の細胞を遺伝子ごと丸抱えして集合した多細胞生物というものになった。ここの時点で私たちは大変な問題を抱えたわけですね。

なぜ問題なのかというと、遺伝子というのは自分のために生きているわけですから、そんな遺伝子が入った細胞をたくさん集めた多細胞状態にして、この連中が言うことをきかなくなったら困るからです。しかも、周りには草原であるとか砂漠であるとか、雨が降ったり降らなかったり、熱いとか寒いとかいろんな環境がある。そういう環境の中で多細胞が生きていくには、内部にある個々の細胞の条件をコントロールしながら、しかも外部の環境と適応するための、生きるための生存戦略のシナリオを書かなければいけない。「進化」というのは、それをやり続けた歴史です。

で、このときに進化のシナリオはなかなか画期的なことをしてみせたんです。多細胞がある行動をおこしたときのことで、たとえば、エサのほうに動いたとか、変なものがあるから細胞内に取り込もうとしたとか、そういうような行為をした。このとき、そのような行為をしたときの個体内の状態を「快感」として記憶しようとしたんです。そして、この快感状態の記憶を細胞間の「液性」がどの程度の興奮状態をもつか、それとも安定した状態になるのかということ細胞間で連絡しあい、そういう快感状態を「一」なら「一」と決めた。このことを原始的な段階で決めたわけですね。

それによって私たちの中には、ある「報酬系」というものが生まれます。つまり「一」なら「一」の快感状態が細胞間を満たしていると、なんらかのプラスのできごとを感じられるような、報酬がおこるような仕組みをつくりだした。これは個体の中の多細胞が同時に体験できる「気分」のようなものです。つまり、ある報酬がそこにおこっている状態を「一」と考え、それを基準として行動することで生物は活動して行くんですね。この「一」のところの報酬系にあたるのが「本能」なんです。私たちが日常使っている本能の正体は、報酬系です。

『二十世紀の忘れもの トワイライトの誘惑』「生命の由来と将来」195～196 ページ

民間医学の叢智を「操体法」にまとめあげた医師・橋本敬三さんが『からだの設計にミスはない』（柏樹社、1978⇒復刻＝たにぐち書店、2002年）に書いた「痛くない方向（快方向）をさぐって、気持ちのいい方向に（呼気で）からだを動かす」操体法にも通じる、「快医学的な考え方」ですね。

3. 『100万回生きたねこ』が、まっとうした「生」のかたち

大人にも人気の絵本『100万回生きたねこ』（佐野洋子著、講談社、1977年）のあらすじです。

死んでは生き返り、死んでは生き返りを繰り返し、100万回もの生を受けた（オス）猫がいました。猫にはいつも飼い主がいました……その数100万人。みんな、猫が死ぬとワンワンと嘆き悲しみましたが、猫自身は一度も泣いたことがありませんでした。ところが、この猫に見向きもしないものがいました。それは美しい白い（メス）猫でした。猫は腹を立てました。そして毎日毎日、白猫に「俺はすごいんだぜ、なんてたって100万回も生きたんだから」と、自慢話をしに行きました。白猫は気のない相槌を打つばかりでした。今日も猫は「俺はすごいんだぜ」と言いかけて、途中でやめました。そし

て「そばにいてもいいかい？」と尋ねました。白猫は「ええ」とだけ言いました。2匹は常に寄り添うようになり、一緒にいることがなによりも大切に感じるようになりました。

それからかわいい子猫がたくさん生まれ、猫はもう得意の台詞、「俺はすごいんだぜ」を言わなくなりました。いつのまにか自分よりも、白猫や子猫たちのことを大切に思うようになっていました。やがて子猫達は巣立って行き、白猫は少しお婆さんになりました。猫は、白猫と一緒にいつまでも生きていたいと思いました。ある日、白猫は猫の隣で、静かに動かなくなっていました。猫は白猫の亡骸を抱いて、生まれて初めて泣きました。100万回泣きました。そしてぴたりと泣きやみました。猫は、白猫の隣で静かに動かなくなっていました。それから猫は、もう決して生き返りませんでした。

(<http://iyoshi.zero-city.com/html/100man.htm>)

この『100万回生きたねこ』の生き様(死に様?)について、柊野浩一さん(詩人)は自著『日本ゴロン』(毎日新聞社、2002年)のなかにも、「深イイ」書評を載せています。

100万回生きて100万回死んだ主人公のオスネコは、最後の最後には二度と生き返らなくなる。彼は生まれて初めて本当の意味で死んでしまうわけなんだけど、たいていの読者は物語の終わりを知ったとき「あー、よかった。めでたし、めでたし」という気分になっているはずで、そこがすごいのだ。

主人公が死んでしまうのに「あー、よかった」と心から思える不思議。その「不思議」の部分は、ぜひ絵本の実物を読んで味わってください。

(中略)

私たちは日頃、無条件に「生=すばらしい」「死=かなしい」と考えるようになってしまっていて、じつはそんな考えは嘘っぱちなんだということをこの絵本は教えてくれる。すばらしくない生もあるし、幸福な死もある。もちろん幸福

な死を迎えるためには、生を充実させなくちゃ駄目なんだけど、生きるということは死を忘れることではない。むしろ死を真剣に想う人だけが、真の意味で生きられるのだろう……と、

(『日本ゴロン』183～184ページ)

やはり『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』に載っているのですが、「死の臨床と死生観」シンポジウムでコーディネーターを務めた竹内整一さんは、パネリストのひとり、作家の柳田邦男さんの【自分は小さい時から「色即是空」という言葉がずっと気になって、その言葉にとらえられてきた、と。これは『般若心経』のなかの言葉で、死んであの世に行くのは漠然と、「空なる世界に戻っていくんだ」というようなものとして理解していたが、それがたとえば、この『百万回生きたねこ』の絵本を見ることによってある種の納得がえられた。】という発言を受けて、

【柳田さんは、雄ねこは、ほんとうに愛するということを知り、真にいのちあるものとなったがゆえに、いのちあるものに平等に訪れる死を受け入れたのではないか、という言い方をされていましたが、つまりいってみれば、その雄ねこはこちらの世界でほんとうに生きた、その生というものをまっとうした、ということではないのか、と思います。だからもうふたたび生き返らなかったということではないのか、と。そして、そのまっとうのあり方が、そこですべて消えて終わるというのではなく、すでに「現世に生きる者の目には見えない純化された精神(それこそ魂と呼ぶべきもの)が棲む空間」(柳田邦男、『大人が絵本に涙する時』、平凡社、二〇〇六)へ移行していったというような、そうした受けとめ方が、そこにはあるということです。】と述べています。

4. たとえ「花びらは散」ろうとも、 散らない「花」が咲く

竹内さんは、やはり同書のなかでとりあげた、『死を見つめる心』(岸本英夫著、講談社、1964年)にある死別のとらえ方を、【「死という別れ」のな

かには、「別れ」ゆく世界が厳として「存在」する
ということの、あらためての確認・承認のうちに、
そこに生きてきた自分自身の、あらためての確認・
承認ということをふくんでいる、つまり、「別れ」
を成立させるのは、「別れ」を告げる相手や世界の
あることと同時に、「別れ」を告げる自分という主
体がいるということ、いたということの確認でも
あり、承認でもある】と紹介した上で、「いのち」
の深奥に迫ります。

柳田邦男さんが『100万回生きたねこ』の最後
の場面に感じたという「色即是空」のイメージに
重ねて連想すれば、浄土真宗の僧侶であった金子
大榮（1881～1976年）が、『意識歎異抄』（岩波文
庫、1949年）の中で、「色即是空、空即是色」をこ
う訳していたことが思い起こされます。

花びらは散っても 花は散らない
形は滅びても 人は死なぬ。

（『意識歎異抄』56ページ）

ここで「空」とは、岸本（英夫）の言い方に
当てはめれば、「徹底した」「全面的」、「全体的」
な「別れ」ということですが、それを介するこ
とにおいて、たとえ「花びらは散」ろうとも、
散らない「花」が咲くということです。

（『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』「さ
ようなら、としての死」193ページ）